

第3回 名木

16



1 シイノキ
ブナ科のシイと呼ばれる常緑高木の総称。暖地に自生。初夏に開花。実はどんぐりになり、食用。



2 ゲッケイジュ
クスノキ科の常緑高木。春、黄色の小花が密集して咲く。南ヨーロッパの原産で、日本には明治期に渡来。



3 ネムノキ
マメ科の落葉高木。東北地方以南の山野に自生。夏、淡紅色の約20個からなる頭状の花をつけ、夕方開花。



4 ボダイジュ
シナノキ科の落葉高木。夏、香りのある淡黄色の小花を下向きにつけ、実は球形で堅い。中国の原産。



16 マデバシ
ブナ科の常緑高木。九州以南の海岸近くに生え、高さ10メートル。6月ごろ、雄花穂と雌花穂とを上向きにつける。



17 ソテツ
ソテツ科の常緑低木。九州南部から沖縄に自生。高さは2～5メートルに達する。雄花、雌花とも茎頂につく。夏に開花。



5 ホオノキ
モクレン科の落葉高木。日本特産。山林中に自生し、高さ約20メートル。5、6月ごろ、黄白色の大型の花を開き、強い芳香を放つ。



6 クスノキ
クスノキ科の常緑高木。暖地に自生し、高さ約20メートルにもなり、長命。5月ごろ、黄白色の小花を密生し、実は熟すと黒色。



7 カリン
バラ科の落葉高木。高さ約8メートル。葉は卵形。春、淡紅色の五弁花が咲く。中国の原産で庭木などにする。



8 ムクノキ
ニレ科の落葉高木。別名ムクエノキ。山地に生え、高さ20メートル。5月ごろ、淡緑色の雄花と雌花とが群がり咲く。関東以南に分布。



9 トチノキ
トチノキ科の落葉高木。山地に自生。5月ごろ、白色で紅斑のある花が円錐状に咲く。近縁種にマロニエがある。



10 ケヤキ
ニレ科の落葉高木。山野にみられ、高さは約30メートルにまで達し、よく枝分かれする。春、淡黄色の小花を新しい枝につける。



11 カラスザンショウ
ミカン科の落葉高木。暖地に自生。夏、淡黄色の小花を円錐状につけ、実は丸く辛みがある。



12 マメザクラ
バラ科の落葉小高木。4～6月白または微紅色の花を下向きに開く。異名をフジザクラという。



13 アカンサス
キツネノマゴ科の多年草。原産地は地中海沿岸から小アジア、熱帯アフリカ。和名をハアザミというがアザミではない。



木々は、最高の教師である。

都市から自然が失われている昨今、芸大キャンパスは緑の聖地である。上野の杜は、植物の種類・数ともに豊かな。

美術学部中央棟前の「保存森」は、あたかも渓谷の奥に入り込んだように、暗く静謐だ。また音楽学部の中央にはクロマツが純和風の盆栽のように佇んでいる。キャッスル前にはソテツは南国を思わせ、奏楽堂前にはオリーブがあるが、地中海原産のその木の前に立つと、ヨーロッパの光に包まれているような気分になる。

巨木も多い。大浦食堂前のシイノキは、周囲五・七メートル、樹齢六百年説もある。図書館横のトチノキは高さ二〇メートル、さらに美術学部中央にはクスノキが天をつくように繁っている。

私は、芸大で生物学の授業を担当している。

私は、芸大で生物学の授業を担当している。

14 コブシ
モクレン科の落葉高木。北海道から九州に分布する。3～5月にかけ、白い花を咲かせる。花弁は6枚で中心に近い部分は赤味を帯びる。



15 ヒマラヤシーダー
マツ科の常緑高木。常緑高木でヒマラヤ原産。ヒマラヤスギとも呼ばれる。明治初期に導入され、庭園木として利用されている。



布施英利

ているが、学生を連れて植物観察をする。芸大の庭は、教材の宝庫である。学生たちは、初夏にはピワを、秋にはギンナンを採り、密かに「栄養補給」をしているようでもある。果実や木の実、コンビニやスーパーだけにあるのではない。大地の恵みから学ぶところは多い。木々は、最高の教師でもある。

上野の山は、昔から緑が豊かだった。百年以上を経て、樹木の数はだいぶ減ったといわれるが、明治・大正・昭和と新たな植樹もくりかえされてきた。

ときに学生たちのスケッチのモデルになり、ときに木陰を提供し、ときには舌を楽しませてもきた。芸大の植物たちは、誰よりも大学の歴史を知っているのかもしれない。

(ふせ・ひでと／美術学部助教授美術解剖学研究室)